

【鳴門教育大学大学院学校教育学研究科】

①. 鳴門教育大学の教員養成カリキュラム改革の動向

鳴門教育大学の教員養成カリキュラム改革は、2001（平成 13）年 11 月の「国立の教員養成大学・学部の在り方に関する懇談会」（所謂「在り方懇」）の提言をきっかけとして、まず学部段階から始まった。翌年の 2002（平成 14）年には、「鳴門教育大学コア・カリキュラム開発研究会」を立ち上げ、音楽科教育の西園芳信教授がその中心となって 11 月には学内の改善推進経費による「教科内容学を基礎とした教員養成コア・カリキュラム開発」プロジェクトに取り組むに至った。そして約 2 年半の議論を経て、2005（平成 17）年 4 月の新入生用のカリキュラムから、既存の教科教育法や教科内容の講義に加えて、「教科教育実践Ⅰ～Ⅲ」を設置し、また教育実習の時期や在り方を見直した。そしてこの「教科教育実践Ⅰ～Ⅲ」と「教育実習」をカリキュラムのコアに位置づけた。

この時の鳴門教育大学の改革に関しては、2006（平成 18）年に『教育実践学を中核とする教員養成コア・カリキュラム—鳴門プラン—』（暁教育図書）としてまとめられており、ここではその詳細の説明は省くが¹、その全体的な特質を 4 点にまとめれば、①教科教育主義（教科枠組みを強く意識し、人間形成という課題に各教科個々がその特性を生かして対応していこうとする分業主義的教育論）、②現場体験の重視（学部 1 年次から「ふれあい教育実習」を実施するなど、通算 3 度に渡る教育実習を行い、現場と理論の往復運動を行う螺旋型カリキュラム）、③二つの教科教育（学習指導要領を前提とし、それをより有効的に運用できる学生の育成を目的とする“現場適応的教科教育”の講義（「教科教育実践Ⅰ～Ⅲ」）と、学習指導要領を相対化して批判的検討をするなど、学習指導要領の枠にとらわれず各種教科教育のあるべき姿について考察していく“学問としての教科教育”の講義（「〇〇科教育論」「〇〇科授業論」など）の二本立てから成るカリキュラム）、④二つの内容学（文学部や法学部と同様の専門科学的講義とは別に、教科内容担当の教員が「教科教育実践Ⅰ～Ⅲ」を通して、学習指導要領の枠組みの有効化を内容的側面から考えていく形で教員養成に貢献していく形のカリキュラム）、となろう。そしてこの中で鳴門教育大学が最も重点を置いたのは、プロジェクトのタイトルからも分かるが、④である。ほぼどの教育大学・教育学系学部にも見られる傾向だが、教科内容担当の教員は、教科教育担当教員に教員養成の指導に関して任せきりになり、自らは文学部や法学部さながらの専門科学的講義に徹する。その結果、教員養成の教科内容の講義は、教育とはほとんど無関係のものも多く見受けられるようになり、「ミニ法学部」「ミニ文学部」と化す。その弊害を取り除くため、西園氏ら改革推進メンバーは、教科内容担当の教員に教材開発などの側面から教員養成に積極的に参与させるようなカリキュラムを構想する一方で、それらの研究活動を「教科内容

¹ 日本教育大学協会編（2006）『教員養成カリキュラムの豊かな発展のために—〈体験〉と〈省察〉を基盤にした「モデル・コア・カリキュラム」の展開—』にも鳴門教育大学の学部改革の動向について示されている。

学」と「学」として位置づけ、そうした研究活動の地位向上を目論んでいる。

この後、鳴門教育大学は教職大学院設置を含んだ大学院全体の改革に取り組むことになるが、その方向性も、教員養成学部カリキュラム改革の延長線上にあると見て良い。

②. 鳴門教育大学の大学院カリキュラム改革と教科実践プログラム

(1) 鳴門教育大学大学院の構造

資料1は鳴門教育大学大学院の組織図である。鳴門教育大学の大学院改革は、教職大学院に関しては学校経営学の佐古秀一氏と臨床心理学の山下一夫氏が担当し、対して既存の大学院の改革は、社会科教育学の草原和博氏を中心とした「GP 開発室」が担当することになった。鳴門教育大学は、教職大学院を立ち上げるに当たっては、文部科学省が示す構想に即したものとするように細心の注意を払ったとされる。そのため、文部科学省の構想通り、教職大学院は学級経営や生徒指導に関する科目が多く開設される一方で、教科教育の領域枠組みを意識した講義は見られない。教職大学院に入学した学生は、特に教科専門に拘らず様々な教科の授業を学校現場で見学することが求められる。またそこには、小・中学校間の壁も無い。つまり教職大学院は授業実践について取り扱う場合でも、主として教科横断的・学年横断的課題の考察をする所として位置づけされているのである。

対して既存の大学院の場合は、教科教育の領域別コースが設置されており、多くの時間を教科に関する科目を履修出来るように講義が組まれ、教科の専門性育成に重点を置いている。つまり鳴門教育大学の大学院は、完全な役割分担を試みた構造であると言える。この両大学院の性格の違いについて草原氏は「教職大学院は special な能力を持つ generalist の育成、既存の大学院は general な能力を持つ specialist の育成と考えていただきたい。両方の「教育の専門職」がいて total な学校運営が生まれるのです」と表現されておられるが、実によくその大学院構想の特質を言い得ている²。

(2) 既存の大学院改革と「教育実践フィールド研究」

さて、鳴門教育大学の学部カリキュラムの改革では、前述の①～④に力点が置かれ、その中でも特に④の、教科内容を担当している教員の役割や意識の変革に力点が置かれた訳であるが、これは同大学の既存の大学院の改革にも当てはまる。というのも、鳴門教育大学は、教職大学院の設置と同時に、既存の大学院の大幅な改革に着手しているのである。その核になるものが、附属学校やその他現場の小中学校との連携で行われる「教育実践フィールド研究」である。「教育実践フィールド研究」は、それまでM1年の学生を対象に1年間かけて行われてきた「教育実践研究」を改変したもので、期間もM1年からM2年の前期までの1年半に延長し、その内容も大きく見直された。資料2は2007(平成19)年度現在の「教育実践研究」の研究課題一覧であり、資料3は新しく実施される「教育実践フ

² 鳴門教育大学は、教職大学院及び既存の大学院に派遣する教師の配分に偏りが出ないように、派遣教員の人数配分について徳島県教育委員会と交渉し、一定の合意に至っている。

フィールド研究」の研究テーマ及び学習チームの組織化イメージ図である。

「教育実践フィールド研究」構想の特質は、資料2と資料3を見比べると一目瞭然である。資料2にもあるように、これまでの「教育実践研究」では、各領域・教科の研究室が個々バラバラに課題を定め、附属学校などと連携してそれをこなしていくものであった。しかし草原氏はこれを次のように改めた。まず、領域・教科専攻の異なるM1学生4～6人を1つのグループとして組織し、学校現場を訪問し授業や休憩時間の子どもたちの姿を観察していく中で、解決が求められる学校現場の課題（＝グループの共通課題）を発見する。そして、その共通課題に対して、各自は自分の専攻する領域・教科の専門性を生かした解決法となる授業を構想し、同じグループの他領域・他教科専攻の学生と意見交換を進めながら解決法の実体化・精緻化を図っていくのである。例えば資料3にあるように、道徳、国語、地歴、技術・情報の4人のメンバーから成るグループは、地元中学校での子どもたちの様子を観察する中で、解決すべき学校現場の課題として「他人を思いやる心を育てる」という研究テーマを定めた場合、道徳を専攻する学生は「優しさとは何か」を考えるような授業を構想していくことでその共通課題に応えることが出来るように試み、国語を専攻する学生は「古典に描かれた人の生き方」をテーマとした授業を構想していくことで課題に応えようと試み、社会を専攻する学生は「社会福祉の思想と現実」をテーマとした授業作りで課題に応えようと試み、技術・情報の学生は「情報の受け取りと発信の為のリタラシー」をテーマとした授業を構想することでこの課題に応えようと考える。なお、資料3左端の「Ⅰ：子どもの心と成長」「Ⅱ：社会と学校の関わり」「Ⅲ：科学と教材」「Ⅳ：地域の自然と文化」「Ⅴ：身体・感性の表現」は、学生が学校現場観察をして課題を見出して行く上での指標となる概念で、これは大学院側が先に設定しているものである。グループは、出来るだけ現職院生とストレート院生が混合された形で編成されるように配慮し、現職の先生は現場での経験を踏まえたアドバイスを、そしてストレート院生はその柔軟な発想による常識への異議申し立てを期待される。

資料4は「教育実践フィールド研究」の年間計画である。まずM1の4月～7月にかけて、学校現場に観察に行き、その後10月頃にグループの共通課題を設定し、その課題に対しての解決策となる授業構想を各自が立てる。その後、再度2月～3月頃に学校訪問をして子どもたちを再度観察したり、現場の教師の話を聞いたりすることで、子どもや教師の視点から自らの授業構想を反省し、修正する。その後、M2の4月に教材研究と授業開発を行い、協力校で実際に実践してみる。そしてその授業の効果を図り、課題を明らかにする。そして教員採用試験を挟んで10月に「教育実践フィールド研究フォーラム」を催し、M1の前で研究成果を発表する。なお、M2は、4月から「教育実践フィールド研究」が終わる10月まで、M1の指導者的役割も兼任する（所謂「相互乗り入れ」）。M2は自らの経験や成果をM1に伝え、M1はそれを自らのこれからの調査や授業構想にM2から学んだことを生かすことが出来るように、学年間の交流を図る。

さて、教科内容担当の教員の位置づけであるが、基本的には、教材開発作りの内容面か

らの支援がその主な役割となる。例えば資料3で、公民を専攻する学生が「科学的な思考力を育成する」という共通課題に、「リーガルマインドとは何か」というテーマでの授業作りで応えようとした場合、公民教育を専門とする教科教育学の教員と並んで、法律学者の存在が必要不可欠であり、また教材開発で大きな力を発揮することになる。

草原氏は、将来的にはグループの課題は、学生側が現場で観察して発見してくるものばかりでなく、徳島県を中心に現職教員から公募することも構想されており、来年度から始めると言う。そこには、公募された課題の解決を学生が試みることで、地元教員が持つ現場の問題を学生は知ることでもでき、また上手く行けばその課題への解決案を生み出すことで大学の地域貢献にも役立ち、また課題解決に従事した学生を即戦力として教育委員会にアピールすることも出来るのではないかと、その氏の戦略がある。

なお、こうした「教育実践フィールド研究」とは別に、既存の大学院では修士論文作成に向けた研究もこれまで通り求められることになる。しかし草原氏は、そうした修士論文にも、「教育実践フィールド研究」の経験が生かされ、より実践を意識した研究が大学院で増えていくことを望んでおり、またそうなることと期待しておられる。

こうした「教育実践フィールド研究」をコアとした既存の大学院の新カリキュラム構想は、学部カリキュラムの特質である①～④と同じ特徴を持つ。つまり「教育実践フィールド研究」は、学部での「教科教育実践Ⅰ～Ⅲ」の大学院バージョンと見ることが出来る。但し、学部の「教科教育実践Ⅰ～Ⅲ」は学習指導要領を前提とした位置づけであったが、大学院の「教育実践フィールド研究」は、必ずしもそうした枠組みにとらわれるものではないところに相違点がある。

③. 「教育実践フィールド研究」の今後の課題

「教科教育実践Ⅰ～Ⅲ」及び「教育実践フィールド研究」をコアとした鳴門教育大学の新カリキュラムは、その作成に当たって指導的役割を担った西園、草原両氏がともに教科教育系の学者であることもあり、その性格は教科教育の実践的側面の専門性育成をより強化していくことを目指したものであると言えよう。こうした鳴門教育大学の新カリキュラムであるが、その開発にあたって両氏が一番苦労したのは、やはり、教科内容担当の教員の抵抗が強かったことであつたようである。そうした事情を考えれば、鳴門教育大学の学部や既存の大学院の新カリキュラムが今後順調に機能していくためには、西園、草原両氏の強いリーダーシップが今後も必要不可欠であろう。

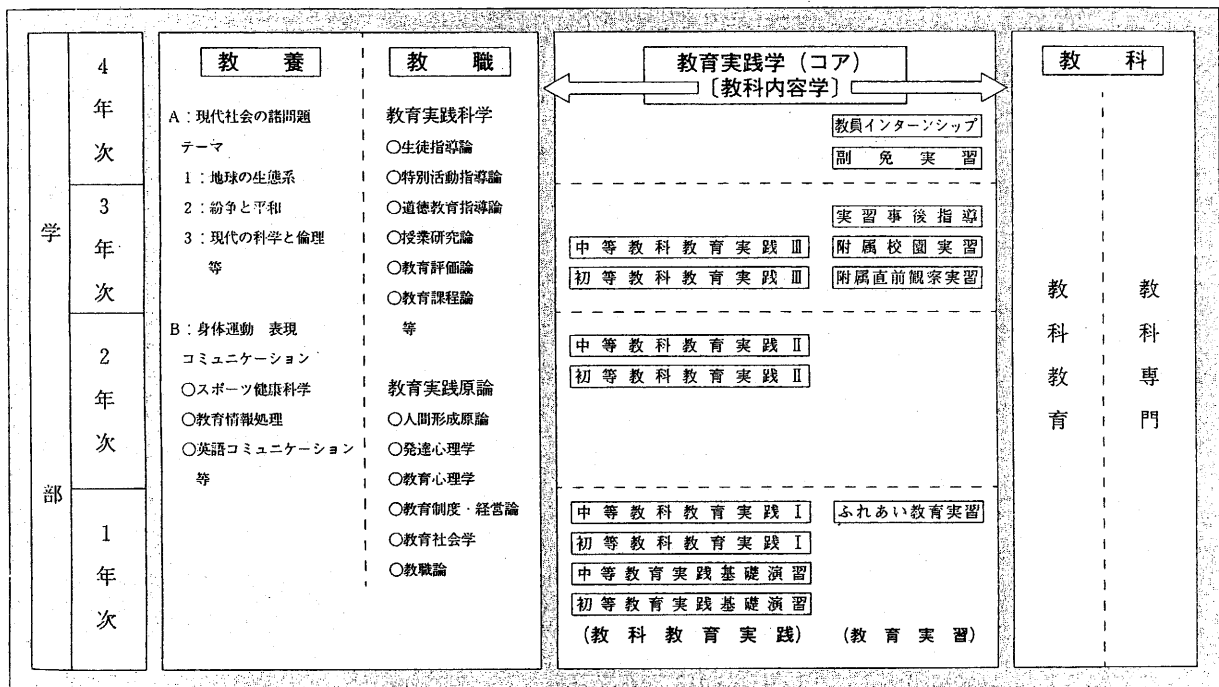
なお、既存の大学院のコアとなる「教科実践フィールド研究」であるが、鳴門教育大学は現在、その一部を試験的に行っており、その成果と課題についての報告を、2008年3月15日(土)に阿波観光ホテルでシンポジウムを行う予定である。

(渡部竜也)

資料1 鳴門教育大学大学院教育学研究科の概要

専門学位課程（教職大学院） ●高度学校教育実践専攻（50人） ≪現職教員≫ ○学校・学級経営コース（10人） ○学校臨床実践コース（15人） ○授業実践・カリキュラム開発コース（15人） ≪新卒学生≫ ○教員養成特別コース（10人）	修士課程（既存の大学院） ●人間教育専攻（90人） ○人間形成コース（15人） ○幼年発達支援コース（15人） ○現代教育課題総合コース（15人） ○臨床心理士養成コース（45人） ●特別支援教育専攻（20人） ●教科・領域教育専攻（140人） ○言語系コース（35人） ○社会系コース（20人） ○自然系コース（20人） ○芸術系コース（30人） ○生活・健康系コース（25人） ○国際教育協力コース（10人）
取得学位：教職修士（専門職）	取得学位：修士（教育学）
人材育成の目的 幅広い視野から問題分析力・対応力・解決力を有し、学校や地域で指導力を発揮できる教員及び実践的対応力に優れた新人教員を育成	人材養成の目的 特定の教科・領域等における専門性を有し、得意分野で優れた実践を展開できる教員を養成

補足資料 教育実践学を中核とした教員養成コア・カリキュラム（学生から見た図） [学部]



(下図は、鳴門教育大学(2006)『教育実践学を中核とする教員養成コア・カリキュラム—鳴門プラン—』(暁教育図書)

23頁より抜粋)

資料2 平成19年度「教育実践研究（旧カリ）」の研究課題一覧

専攻・コース	研究課題名	協力学校等	振替金額
人間形成	① 特活(健康教育) 小学校における心の健康教育のあり方	附属小学校	98,300
	② 抑うつ気分を訴える生徒を対象としたポジティブ感情とポジティブ・コーピングを主要操作因子とした健康・適応への導き	徳島北高等学校	98,300
	③ 徳島県民俗研究と教材化の試み	徳島県民俗文化財センター	98,300
学校改善	① 事務室長をリーダーとした事務のグループ化による学校運営システムの構築	佐治小学校 事務職員研究会	98,300
授業開発	① 生活科(生活学習)の活動における子どもの行動観察やその分析と考察	附属小学校	98,300
生徒指導	① 道徳 道徳学習における評価について	附属小学校	98,300
臨床心理士養成	① 不登校生徒への訪問型支援に関する教育実践研究	徳島県総合教育センター 徳島市教育研究所	98,300
幼年発達支援	① 保育の質を問う —遊誘財が促す幼児期における体験の多様性と関連性—	附属幼稚園	98,300
	② 幼少連携の教育プログラム開発	附属幼稚園	98,300
	③ 特別支援を必要とする幼児の集団生活適応について	附属幼稚園	98,300
総合学習開発	① 地域素材を生かした総合的な学習の単元開発と表現・発信方法の研究	石崎小学校	98,300
	② 日本語支援が必要な児童のための教材開発と学校運営	石浜西小学校	98,300
特別支援教育	① 現場実習における実習先での行動の記録	附属特別支援学校	98,300 × 1.5
	② 現場実習での課題に視点をあてた日常生活指導	附属特別支援学校	
	③ 生徒の実態把握のアセスメント(発達検査等) K-ABC, PEP-R, WISC-III, MEPA等	附属特別支援学校	
	④ 生徒への日常生活指導(観察と記録)	附属特別支援学校	98,300 × 1.5
	⑤ 授業研究(生活単元学習, 自立活動等)	附属特別支援学校	
	⑥ 日常生活の指導に関する研究	附属特別支援学校	98,300 × 1.5
	⑦ 特別支援教育の推進について(障害児教育講座)	桑島小学校	
	⑧ 通常学級に在籍する軽度発達障害児への支援のあり方について	新町小学校	98,300 × 1.5
	⑨ 知的障害及び肢体不自由のある児童に対する効果的な日常生活・学習指導	石崎小学校	
	⑩ 特別支援学級(自閉症児への支援)	北山南小学校	
言語系(国語)	① 国語科 国語科単元学習の発想を導入した授業の創造	附属小学校	98,300
	② 国語 語彙指導(言語・文法等)	附属中学校	98,300
	③ 伝え合う力の育成をめざして	黒崎小学校	98,300
言語系(英語)	① 英語 小学校英語活動の構想と展開	附属小学校	98,300
	② 英語 目標・指導・評価の一体化を図った英語授業	附属中学校	98,300
	③ 高校生における効果的なライティング指導	附属高等学校	98,300
社会系	① 社会科 主体的に社会認識を形成する社会科学習の展開と構想	附属小学校	98,300
	② 社会 GISを活用した社会科授業の開発研究	附属中学校	98,300
	③ 社会認識形成を支援する映像メディア教材の開発と試行	なし	0
自然系(数学)	① 算数科 数学的な考え方を高める算数科授業の構想と展開	附属小学校	98,300
	② 数学 数学的活動の楽しさが実感できる教材開発と授業実践	附属中学校	98,300
自然系(理科)	① 理科 植物細胞の観察の工夫	附属中学校	98,300
芸術系(音楽)	① 音楽科 子どもの発達段階に応じた歌唱指導のあり方	附属小学校	98,300
	② 音楽によるコミュニケーションの成立をめざした音楽授業の工夫	第一小学校	98,300
芸術系(美術)	① 図工科 造形表現を豊かに育む授業の構想と展開	附属小学校	98,300
	② 美術 美術鑑賞学習	附属中学校	98,300
生活・健康系(保健体育)	① 体育科 体育学習における情報機器の効果的活用について	附属小学校	98,300
	② アウトドア・スポーツ「水辺運動」	徳島北高等学校	98,300
	③ スポーツイベントの企画・運営	徳島県バスケットボール協会	98,300
生活・健康系(技術・工業・情報)	① 技術 ロボット製作を通じたものづくり指導	附属中学校	98,300
	② 技術 曲げ木を用いた作品製作指導	附属中学校	98,300
生活・健康系(家庭)	① 家庭 技術力を伸ばす調理実習の工夫	附属中学校	98,300
	② 一人ひとりのよさや個性を生かした実践的・体験的な学習活動の展開(家庭科)	佐治小学校	98,300

資料3 「教育実践フィールド研究（新カリ）」の研究テーマ・学習チームの組織化のイメージ

- 研究テーマを共有する4つのチームは、所属コースの専門性を活かしつつ、相互に成果を交換・交流しながら、異なる授業を構想し、実践し、反省する。
- 1つのチームは、4人～6人程度の院生で編成する。①現職院生、②2年課程ストレート院生、③教員養成プログラム院生が混合するように配慮する。
- 1つの研究テーマに、4人以上の教員を配当する。30回の授業を、①チーム個別に指導する時間、②4チーム協働で指導する時間、③全学的に発表・討議する時間で構成する。
- そのためのモデルカリキュラムを、コアカリ委員会で作成する。30回のスケジュールは、原則すべてのチームで歩調を合わせる。

目標領域・教育課題	目標・課題にもとづく研究テーマ	チーム(4-6名)		
I: 子どもの心と成長	他者を思いやる心を育てる (中学校)	人間形成①	優しさとは何か	道徳
		国語①	古典に描かれた人の生き方	教科(国語)
		社会①	社会福祉の思想と現実	教科(地歴)
		技術・工業・情報①	情報の受け取りと発信のためのリタラシ	教科(技術・情報)
		臨床心理士養成①	大人になるとは	道徳
	子どもの社会化を支援する (小学校/幼稚園/各種施設)	幼年発達支援①	自分のできること、できないこと	教科(生活)
		現代教育課題総合①	ルールって何だろう	総合
		家庭①	家族の支え、家族の形	教科(家庭)
		臨床心理士養成②		
	臨床心理士養成コース特設テーマ (各種施設)	臨床心理士養成③		
		臨床心理士養成④		
		臨床心理士養成⑤		
		特別支援教育①		
	特別支援教育コース特設テーマ (特別支援学校/小学校)	特別支援教育②		
		幼年発達支援②		
幼年発達支援コース特設テーマ (幼稚園)	幼年発達支援③			
	人間形成②	おじいさん、おばあさんの知恵	教科(生活)	
	地域文化の継承と創造 (小学校/幼稚園)	臨床心理士養成⑥	大切にしたいモノ、心、ひと	特活
音楽①		郷土の伝わるしらべ、リズム	教科(音楽)	
英語①		私たちの暮らしと外国の暮らしを比べて	総合or小英	
人間形成③		職業の分化と社会参画	教科(社会)	
キャリア形成を支援する (中学校)	臨床心理士養成⑦	生き甲斐、働くよこび	総合	
	数学①	なぜ数学は生きる上で必要なのか	数学or特活	
	技術・工業・情報②	物づくりの楽しみと苦しみ	教科(技術・工業)	
II: 社会と学校の関わり	人間形成コース特設テーマ (小学校)	人間形成④		
	科学的な思考力を育成する (高校)	社会②	リーガルマインドとは何か	教科(公民)
		数学②	三角関数と社会生活とのつながり	教科(数学)
		理科①	力学と社会生活とのつながり	教科(理科)
		家庭②	消費生活のメカニズム	教科(家庭)
	読解力を育てる教材づくり (小学校)	現代教育課題総合②	記号とコミュニケーション	総合
		国語②	文学のロジカルでクリティカルな読み	教科(国語)
		理科②	ウソを見破る一疑似科学	教科(理科)
	国際教育協力特設テーマ (…海外…)	美術①	作者のメッセージ	教科(図工)
		国際教育①		
III: 科学と教材	徳島の自然とともに生きる (小学校/特別支援学校)	特別支援教育③	自然を楽しむ、土の香り・水の香り	総合
		現代教育課題総合③	吉野川の水質とその変化	総合
		理科③	地形の不思議、地球のちから・水のちから	教科(理科)
		体育①	地形を活かした野外活動	特活
	歩き遍路の意味を追求する (中学校)	人間形成⑤	お接待の心、いたわりの心	道徳
		臨床心理士養成⑧	歩くことで、自分を見つめる	特活
		英語②	遍路文化を伝える英語パンフをつくろう	教科(英語)
	総合学習開発コース特設テーマ (小学校)	社会③	人はなぜ巡礼をするのか	教科(社会)
		現代教育課題総合④		
	IV: 地域の自然と文化	パフォーマンスを通じて 表現力を養う (中学校)	諸教科	絵本と演劇を通じて社会性を養う
英語③			正しい発音、分かる発音、伝わる発音	教科(英語)
音楽②			自然な発声、美しい発声、感動を呼ぶ発声	教科(音楽)
体育②			武道とダンスと身体操作	教科(保体)
幼年発達支援④			清潔な生活、整理整頓	道徳or生活
美に触れる、美を語る (小学校/幼稚園)		国語③	文字を美しく、手で書くこと	教科(国語)
		社会④	地図の表現、地図の美しさ	教科(社会)
		美術②	日用品に隠れた造形美	教科(図工)

(人間形成5、臨床心理8、幼年発達4、総合4、特別支援3、国語3、英語3、社会4、数学2、理科3、音楽2、美術2、保体2、技術2、家庭2、諸教科1)

資料4 「教育実践フィールド研究」のタイムテーブル

旧カリから新カリへの移行措置ならびに授業の日程

